

日本における課題

小 風 秀 雅

海外、とくにアジアにおける日本研究の発展と深化を促進しようとする場合、大学として取り組まなければならぬ課題は何なのか、について二点問題提起をしたい。

第一は、研究交流という点から見た場合、海外の日本研究ないしは日本に対する関心に対して、果して日本側が的確に応えていない、あるいは日本の研究成果はそのままでは諸外国の関心に対する十分な回答になっていない、という問題である。場合によれば日本のなかにおける研究の問題点が、瑣末な部分までそのまま輸出されていることすらある。そうした状況をどのように理解し、如何に改善していくかなければならないのか。

とくにアジアの諸国、諸地域の日本に対する関心のあり方は、それぞれの国・地域の歴史的、文化的状況を反映したものであり、その内容は千差万別である。日本への関心は裏返せば自国に対する関心であるが、なぜアジアにおいて、日本に対する関心が高いのかという、関心の内実についての十分な認識なしには、十分な交流は不可能である。しかし、そうした根底的な問い合わせ日本側から發せられることはほとんどないといってよい。

他面、世界における日本研究は、地域研究としての日本学が主流であり、その範囲は言語・文学・文化・社会などにまたがる多様なものである。しかし、こうした関心に対応すべき日本側の研究分野は専門化、細分化されており、従来はそうした専門分野の範囲内において対処されてきている。ようやく最近になってその限界が意識されるようになりつつあり、国際日本学という分野は、日本の研究状況のなかでは、学際的な研究分野の開拓として意識されつつあるものの、どのような処方箋が作成されるべきかという点については、解答は出されていないといってよいであろう。

こうした結果、海外における日本学研究と日本の専門研究がうまくかみあわない状況が継続しているのである。

日本(ないし外国)にたいする関心が総合的なものであるのはある意味で当然である。もともと近代日本のヨーロッパ・アメリカ研究は言語別に進められたのであり、英学、仏学、独学、ロシア学、米学、さらには「支那学」といったジャンルが成立していた。自然科学も含めて科学は言語別（国別・文化別）に導入された。一例を挙げるならば、夏目漱石は、英学者であって英文学者ではないのである。それが19世紀末以降、次第に専門に特化していくなかで、現在のディシプリンが成立していったことを忘れてはなるまい。

今、我々が直面しているのは、総合的な日本に対する関心にどのように「総体」として応えていくか、という課題である。

本シンポジウムは、3年にわたってこうした点の解明を試みてきた。その結果、学際的分野の研究の開拓と深化、研究者の相互連携の強化、日本学研究の現状にたいする認識の共有と問題点の明確化、など多くの重要な成果を挙げてきたが、未だ十分とはいがたいであろう。

ここで、研究視角の点からひとつだけ指摘するならば、「日本」そのものの国際性をどう認識するのか、という問題である。換言すれば、日本に対する関心は、総合的であると同時に国際的比較のなかで形成されているという点についての掘り下げがまだ不十分であるという点である。

現在の日本学ないし日本研究は、東アジアの国際比較のなかで展開されており、広く言えば東アジア世界の視野のなかで捉えられている。日本理解のためには、中国、韓国をはじめとする東アジアの研究が必要であり、日本の文化・社会の理解には、こうした国際交流の要素が不可欠である。アジア研究との連携が日本学の進展には必須である。その意味で、国際日本学は、日本研究者だけのものではない。しかし、日本の研究者には、そうした国際比較に対する研究視角はまだまだ希薄である。日本学における国際的要素が強化される必要があると思われる。

第二は、海外における対日関心が、地域によって多岐にわたる以上、こうした日本側の研究的取り組みだけで

は不十分であり、より積極的に研究交流を深めなければならない、という点である。そのなかでも、今われわれがとりあえず解決しなければならない課題は何かを、実践的に考えることが重要である。とくに本学がアジアの留学生を多く受入れ、卒業生・修了生がすでに活躍している現状を考えるならば、アジアに対してどのような取り組みがなされるべきか、真剣に検討する時期がきているのではないか。

最大の問題点は、交流を深めるためのネットワーク作りであろう。本年4月に本学にも留学生センターが設置された。そこで今後どのような留学生のためのサポートシステムが作り上げられなければならないのか。受け入れる側の大学として考えなければならない問題は何なのか。さらに、国際交流である以上、学生・教官を送り出し、恒常的な国際交流を図る努力が必要であるが、そのためにはどのような態勢作りが必要なのか。1対1の交流関係ではない、多元的な日本学ネットワークが必要なのである。

その意味で、留学生センターの活動に依存するに止まらず、本学がアジアの日本学研究者の情報センターとして、あるいはアジアの女性研究者たちの研究センターとなり、アジアの日本研究者および本学卒業生の国際的ネットワークを形成することは、きわめて重要かつ緊急な事業であると思われる。

小風 秀雅（こかぜ ひでまさ）

1951年生。東京大学文学部国史学専修課程卒。文学博士（東京大学、1995）。お茶の水女子大学教授。日本史学（日本近代経済史・経済政策史・交通史）専攻。最近の著書に『対立と妥協－1930年代の日米通商摩擦』（共著、第一法規、1994）、『帝国主義下の日本海運』（山川出版社、1995）、『横浜と上海』（共著、横浜開港資料館、1995）等。